

解説 14

神馬馬形

(十和田市馬事公苑称徳館)

馬の文化資料館である当館の約8割の資料は、盛岡市の個人コレクターから十和田市が譲り受けたものである。

写真の資料もその一つで、鎌倉時代後期に奉納された木製の馬形である。馬の顔はもちろん体の細部まで精巧な作りとなっており、願いの強さを感じさせる。

古代、神は騎乗姿で降臨するとされ、馬は神の乗り物と考えられていた。そのため、祭礼や祈願のために神の好む馬を神馬として奉納した。

奉納する馬の毛色にも意味があり、降雨祈願には雨を表す黒い馬を、晴天祈願には青空を表す白い馬（のちに赤い馬）を奉納した。

元は生きた馬を奉納していたが、当時馬は貴重で、馬を奉納することによる飼養料など様々な経済的負担があり、生きた馬の代わりに馬形が奉納されるようになり、板を馬の形に裁断して彩色した板立馬や、木の板に馬の絵を描いた絵馬が奉納されるようになっていく。

祈願の内容も、中世には武士の戦勝祈願、

近世末期以降庶民が馬を所有するようになると、馬の無病息災や家内安全といったように、より身近な願いへと変わっていく。現在のような絵馬の形が定着したのは江戸時代で、祈願の内容によって馬以外の絵柄も見られるようになり、現在もなお人々に親しまれている。

称徳館では、南部藩の馬産や軍馬補充部三本木支部はもちろん、馬がいつごろ日本に渡り、当時の人々にとってどのような存在であったのか、馬形を交え古代から続く人と馬との関わりについて解説している。

現在、ともに暮らしていたころと比べ身近な存在ではなくなりつつあるが、馬に関する歴史・文化を永く後世に伝えるためにできた当館の展示により、当時の人々の馬に寄せる深い愛情と切実な願いを感じていただきたいと思う。

(十和田市馬事公苑 ^{しょうとくかん} 称徳館)

学芸員 戸館 知子)



神馬馬形（鎌倉時代後期） 幅 360mm 高さ 340mm 奥行 95mm